

# 油浜研究所

中野  
劇団

# 油浜研究所

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

あぶらばま

油浜博士

うりやま

瓜山助手

研究室。博士がいる。助手が勢いよく入って来る。

助手 油浜博士！

博士 おお、どうした？ 瓜山君。久しぶりだな。

助手 これを見て下さい！

博士 何だね、これは。

助手 何だと思う？

博士 いきなりため口か、瓜山君。これは、ポラロイドカメラじゃないのかね？

助手 私の自作なんです。できたばかりで。

博士 おお！ まじで！ すげえ！ やっべ！ 腰抜けた！

助手 いやいや、こんなところで驚かないで下さいよ！

博士 凄い凄い、びっくりだ。何がびっくりってこれ作るために一ヶ月も有休取ったのだったのびっくりだ。

助手 聞いて下さい油浜博士。一見ただのポラロイドカメラですけど、実は特別なカメラなんです。

博士 そうか、これが特別なカメラか！ おお！ すげえ！

助手 ああもうめんどうくせえ！ どう特別なのか聞いて下さい！ どう特別なのか！

え？

助手 「え？」じゃなくて。油浜博士、今日どうしちゃったんですか？

今日、変ですよ。

博士 いやあ、イメチェン？

助手 凄いや話しづらいです。

博士 そうそう。そうなんだよ。ほら、いつも君と一緒にいると、真面目にやってる自分が損してる気がして。人ってどういう風に振る舞われると会話しづらいかの研究中だったんだ。

助手 そんなことはどうでもいいですけど、博士、一体どう特別なのか当ててみて下さいよ。

博士 ほら来た！ そうくると思った！ そうだな。うーん。シャッター押すところから（レンズから）パンチが出てくるのか。

助手 違います。

博士 自分の方に出てくる？

助手 ええ？ もう、そんなもん作るのに一ヶ月も休み取らないですよ。

博士 何にしても無断で一ヶ月も休み取らないでほしいんだけどね。

助手 どう特別だと思いますか？

博士

うーん、何だろうなあ。……材質が凄い固いとか。逆かな？ 見た目に反してもちもちしてるとか。触ると凄くもちもちしてて癒されるとか、材料を一切使わずに作ったとか。

助手

カメラの機能に触れて下さい。

博士

ああ、そっか。

助手

「ああそっか」？ だからね、普通のカメラは写真を撮るわけですけど。

博士

普通はそうだよな！

助手

ええ。このカメラは、特別なものを写すことができます。

博士

へその緒とか、成人式の写真とか。

助手

それだと特別なものを写すって決めただけの普通のカメラじゃないですか。違いますよ。普通だったら写せないものが写せるんです。

何だと思いますか。

博士

それは作った君の方がよくわかってるんじゃないのかな。

助手

ええ、わからなくて聞いてるんじゃないんです。ただ興味な

いんですか！

博士 普通撮れないもの？

助手 そうです。

博士 パンチが出てきてびっくりした人の顔とか？

助手 それ別に撮ろうと思ったたら撮れるじゃないですか。

博士 では、君の発明は、作ろうと思っても作れない物を作ったとい

うのか？

助手 そうなんですよ。

博士 作ろうと思っても作れない物を作ったっていうのはおかしい話

だよ。わかった。それこそが特別ってことだ。そうだろう？

助手 ええだからどう特別なのかを答えろって言ってるんですよ。

博士 そうだろう、そんな気がしてたんだが。

助手 さっきから会話が三歩進んで三歩下がってるんですけど。

博士 よし降参だ。

助手 少しは考えて下さいよ。

博士 いやいや、ここまで考えても出てこないんだ、降参だ。

助手 ……実はこれ、未来を――

博士 わかった！ わかった！ 未来を写すカメラ！

助手 ……ええそうです！ このカメラで未来を写すことができるんです。

博士 へえ……。

助手 まだ試作段階ですけど、早く博士に報告したくて、有休返上して来たんです。

博士 まだ休むつもりだったのか！ しかし、それって理論上不可能だろ？

助手 それを可能にする方法を閃いたんです。世紀の発明なんですよ。

博士 それが本当だったら世紀の発明じゃないか！ よし説明してくれ。

助手 未来を写すって言うってもまだ試作段階です。

博士 そっかあ畜生！

助手 徐々に改良を重ねて、今漸く、五秒後の未来まで写すことが可能

になりました。

博士

おお、何かりアルだな。一年後とかだと嘘くさいけど、実際にそんなカメラを作れるとしたら、たぶん、最初はそんなもんなはずだ。これが昨日とった写真です。

助手

ほう。時計が写ってるな。

博士

ええ。カメラの撮影時刻と見比べて下さい。時計の方が五秒進んでるでしょ？

博士

おお。……もうちょっと確実な証明ってできないかな。と、言いますと？

博士

これ、時計が進んでるとかではないのか？

助手

いえ、時刻はきっちり合わせました。うん、そうなんだろうけど、その辺を証明してもらわないと。どうして？

博士

どうして？どうしてときたか。やっぱり君には敵わないなあ。いや、だから、時計を進めてるかも知れないから。



助手

進めてないですよ。僕そういうことするの嫌いですから。

博士

うん、そうだと思うよ、そうだと思うけどね。君の誠実な人柄を知らない人がこの写真を見たって俄に未来を写すカメラとは信用できないだろ。胡散臭いという言葉はこの写真のためにあるようなもんじゃないか。

助手

別に信じようとしないうちに信じてもらいたいとは思いませんけど。

博士

うん、まあそうかもしれないけど、ほら、これはこれこれこうだからこうで間違いないってきっちりしたものがないと。とりあえず今、撮ってくれないかな。そしたら少なくとも僕は信じる事ができるだろ？

助手

つまり、今は信じてない？

博士

信じてるよ、信じてるけどね、うーん、もっと信じられると思うから。

助手

ということは何も信じてないってことですよ。信じられるか信じられないかは0か1のものですよね。七割信じてるとかって、三割

信じてないことになって、その三割信じてないっていうのがある限り、七割信じてるっていうのは全くもって無意味なことじゃないですか。

取りあえず見せてよ。

まあ、別にいいですけど。取りあえずじゃあ説明しますね。一応資料を用意しましたので、ざっと目を通してもらえますか。

いや、撮ってくれた方が早いと思うし。

あ、そうですね。これ、ちょっと写真を撮ってから出て来るまで一分くらいかかるんですけど、いいですか。

えと、五秒の未来までしか撮れないんだよね？

五秒後まで撮れるようになったんです。

うん、ごめん、言い方が悪くて。で、現像に一分かかるんだよね？

いえ、紙が出て来るまでが一分です。そこに絵が浮かび上がって来るまでさらに三分ちよいかかります。

そんなにかかるの？

博士

助手

博士

助手

博士

助手

博士

助手

博士

助手 はい。

博士 まあ、最初だからね、だんだんあれだよ、先の時間とかも撮れるようになってくるよね。

助手 それは難しいかと。

博士 え？

助手 たぶん、計算上、ある部品の小型化を図ることができれば、次の日の写真とか、一年後の写真とかも撮れるようになると思うんです。ただ、その分、比例して現像までの時間も長くなる計算で。

博士 そうなの？

助手 ええ、計算上は。

博士 その計算を乗り越えることはできないの？

助手 ええ。科学の限界です。

博士 君の限界じゃなくて？

助手 イコール科学の限界です。

博士 じゃあ、これ改良していっても、あんまり使い道ないってことだ

よね？

でも未来を写せるって事実には変わらないわけだし。学会に発表  
しましょう！

博士 うん、まあそうだよ。確かに歴史的な発明だよ。……でもうち、  
心理学研究所だからなあ。

助手 ……だから？

博士 ……ええ？

終わり。